



# 教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticano の転載許可済  
©1990  
発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
☎(0797)31-3452

## 燃えるローソク

### 〈洗礼は決定的なできごと〉

御両親の皆さん。  
代父母の皆さん。

**1** 今日の典礼は、公生活の始まりを示す出来事として主の生涯において重要な位置を占めるイエズスの洗礼を記念します。

ルカの福音書に記されている場面には、意義においても教えにおいても実に多くのことが含まれています。まずイエズスはどのようになされたのでしょうか。イエズスは洗礼者ヨハネから洗礼を受けるため、罪の赦しをうけようとして来た人々の中に並べられました。ヨルダン川の水に体を浸す儀式は内なる清め象徴であり、先駆者ヨハネのメッセージに忠誠を表すことでもあったのです。預言され待望されていた救い主は、歴史上よく知られた民と場所にお生れになりました。選ばれた民から宗教

上の教えを受け、それを啓示の完成までもっていかれたのです。次に、洗礼の場面を見ましよう。そのときイエズスの神性が見事に示されました。イエズスが洗礼を受けて祈っておられると、「天は開け、聖霊は鳩のような形をとってその上に下り、『あなたに私が喜びとする私の愛する子である』という声が天から聞こえた。」(ルカ3・21-22) この時に起ったことは私たちの信仰の土台です。

キリストは人となられたまことばです。それゆえ私たちはイエズス・キリストを信じ、その教えを実行し、真の信仰のうちに確信するキリストの神性は、キリスト信者としての生活に完全な意味を与えるのです。一言でいえば、イエズスの洗礼において、キリストの贖いの使命も明白に示されたということです。洗礼

者ヨハネは次のように言いました。「私は水で洗礼を受けるが、私よりも力ある方が来られる。…その方は聖霊と火であなたたちに洗礼を授けられる。」(ルカ3・16) 神は私たちに罪から贖うためにキリストにおいて人となられました。実際、イエズスはヨハネによる洗礼とは根本的に異なる洗礼を自ら制定されました。それはもはや単なる象徴的儀式ではなく、人間の本性が受けついで罪を打ち砕き、神の生命を与える秘跡なのです。

**2** 本日は、生れてまもない子供たちにキリスト教信仰による洗礼を授けます。

洗礼は全ての基であり、変化をもたらす秘跡です。洗礼によって、託身(受肉)と十字架の犠牲を通してもたらされた贖いの功徳が授けられ、原罪を赦し、神の三位一体の命に与る権利を回復させる成聖の恩寵が与えられ、消えない印章が刻みつけられます。印章とはキリストの司祭職への参与の第一歩であり、従って根本的に自らを神に奉獻し、キリストの神秘である教会の一員とならせるものです。

洗礼は人間の一生を決定する重大な出来事です。洗礼によって真の尊厳と本物の神の生命に与るという至高な美しさが与えられます。

**3** 御両親、そして代父母の皆さんは、この幼い子供たちの今後のキリスト教的教育という責任を負っておられます。子供たちに洗礼の超自然的意義を、少しずつ理解させてください。この使命と責任を忠実に果たしてください。

## 各自が

## 〈キリストの公現〉となれるよう

### なれるよう

**1** 兄第姉妹の皆さん。いま心をこめて過ごしている降誕節に、神の救いの計画が典礼に沿った祝日によって明白に示されます。ここ数日の内に、その大きな展望を見ることが出来ます。私たちのために幼子となり、ベトレヘムの馬小屋に横たわる神の子について黙想するうちに、聖家族の比類なき模範、主の洗礼、公生活の始まりへと移っていくのです。

今日の一般謁見は二つの大切な祝日のちょうど中間にあたります。神の母聖マリアと主の公現の祝日です。二つは共に深い意味をもつ秘義で、互いに密接につながり合っています。これについて考えるのはとても有意義なことです。

**2** 「公現」は示すという意味で、お生れになったばかりの救い主が異教徒の世界に最初に示されたことを記念します。

教会の歴史において、公現は昔から行われていた祭りの一つでした。二世紀にはすでに聖なる日、神の顕現(出現)の日として祝われていましたが、この初期の時代には公現は主の洗礼の記念と結び合わせて祝われていました。主の洗礼において、天の御父はこの世に御子を公に証され、その御言葉聞くように私たち全員を招いてくださったのです。しかし後に、博士たちの訪問が中心になってきました。博士たちはイスラエル社会の外でキリストを知るよう招かれた人々の代表として敬われていました。

教会聖伝(承伝)の注意深い証人である聖アウグスティヌスは、彼らがなぜ普遍的な意味をもっているのかを説明し、贖い主を最初に知った異教徒である博士たちが全ての人の救いの象徴であることを確認しました。(説教203参照) 初期のキリスト教

美術において、遠くからやって来て御子の前にひざまずく学識と富、権力を備えた博士たちの訪問の美しい情景は、イエズスの幼年期の出来事として光栄にも他の何物にもましてたびたび描かれました。

しばらく後に、同じ祭日に、カナの婚宴での神の顕現(公現)が祝い始められました。そのときイエズスは、最初の奇跡を行われ、公に神として御自身を現されたのです。このように沢山の公現があります。さまざまな方法で神は御自身を人類に現されたのです。今日はその中の一つを特に強調したいと思えます。つまり他の全ての公現の根底をなすもの、神の母マリアのうちに示された主の公現です。

▼キリストの秘義の重要な部分

③ 最初の信仰宣言である使徒信経の中でキリスト信者は、イエズスは処女マリアより生れたと宣言します。信経のこの箇所には、教会の福音が示す二つの重要な真理が含まれています。

まず一つは、神は女からお生れになったということです。(ガラツィア



4・4) 神は、御母マリアの胎内で受肉され、九ヶ月とどまること、そしてマリアの処女性を傷つけることなく生れることを望みでした。これは神の救いの計画において、神の母マリアが不可欠な部分としてキリストの秘義に組み込まれていたことと表れます。

もう一つは、マリアの胎内でイエズスが受肉されたのは、聖霊の働きによってなされたということ、つまり人間の父親の協力なしに行われたということ。私は男を知りません(ルカ1・34)とマリアは主の招きに答えました。すると天使は、神にはできないことはない、とはっきりと告げます。(ルカ1・37参照) マリアは人となられたみことばの、人間としての唯一の源となられたのです。

④

このように考えると、マリアの母性は、この世における神の全く特異な、新たな公現を成すことがわかります。

天使の御告げ以前にマリアが選んだ終生処女性は、地上の生活の地平線を越えて、すでに公現としての価値をもっていました。この選択は神

とその愛への完全な奉獻を選んだことを示し、それ自体人間の心の要求を完全に満たしうるものでした。そして自然の生物学的法則の域をこえて起った御子の懐胎という事実は、神が実際に現存なさることのもう一つの現れだったのです。前後に起ったイエズスの誕生というすばらしい出来事は、マリアのうちに、マリアを通して、神が御自身を世界に啓示

▼仕事は愛のあらわれ



(ナザレトの家族生活において、仕事は愛のあらわれでした。) 福音書は、聖ヨセフが家族を養うために従事していた仕事を具体的に大工と書いています。この簡単な言葉に、聖ヨセフの全生活が要約されています。イエズスにとつてその頃は隠れた

「贖い主の守護者」

(使徒的勧告の抄訳)

の頃は隠れた生活の時でした。聖ルカは神殿で起った出来事を述べた後で次のように記しています。「イエズスは彼らとともに下り、ナザレトに帰って、二人に従って生活された。」(ルカ2・51) ナザレトの家でイエズスが従われたこと、つまりイエズスの従順は、ヨセフの仕事に加わられたという意味に取るべきでしょう。皆が父親だと考えていた人から仕事を習ったイエズスは、「大工の息子」として知られていました。ナザレトの聖家族が救いと聖性の面で私たち

されたことの頂点にくるものです。処女マリアの胎内でみことばは肉となられ、自らを世界に示されました。ですから、マリアはエフュソ公會議が宣言するように、テオトコス(神の母)なのです。マリアは、神の現存を目で見ることができるようになるため、神が御自身に選ばれた特別な場、御方です。

クリスマスのこの時期に聖母に目の家族の模範でありモデルであるのと同じく、大工ヨセフのかたわらでイエズスの仕事もまた、私たちの模範でありモデルなのです。近年になって教会はこの点を強調し、五月一日に労働者ヨセフを典礼の上で記念することに決めました。人間の携わる仕事、特に肉体労働は福音書のなかで重要な位置を占めています。神の御子の人性とともに、仕事も御

託身(受肉)の秘義のなかで取り上げられ、特別な仕方であられたのです。イエズスと一緒に作業台で仕事を続けていたヨセフは、人間の仕事を贖いの秘義に近づけました。



イエズスが「知恵と年齢と恩寵において」人間的に成長されたとき、(勤勉の徳)は大きな役目を果しました。「仕事は人間的な善であり」、仕事は「自然を変え、人

を向けていると、私たちもマリアのように、この世にキリストをもたすため、キリストを各自の生活の中に迎え入れる義務を強く感じます。家庭で、職場で、それぞれがキリストの小さいながらも輝く(公現)となるよう努力しなければなりません。これを、新年の最初の謁見にあたって、兄弟姉妹すべての方々に望みます。(八九・一・四)

人間を(ある意味でよりいっそう人間らしく)します。(回勸『働くこと』について)9)

人間の生活にとつて仕事は大切な要素ですから、その意味がよく知られ理解されねばなりません。そうならば、「すべての人が創造主であり贖い主である神に近づき、人間と世界のための救いの計画に与ることができ、日々の生活のなかで信仰を通して司祭・預言者・王という三重の使命に与って、キリストとの友情を深めることができます。」(同上24)

決定的に重要なこと、それは日常の仕事の聖化です。一人ひとりが自分に応じて達成すべき聖化であり、すべての人の手に届くところにある模範・聖ヨセフに従って深めて行くべきことなのです。「聖ヨセフはキリスト教が偉大な運命にまで高める謙虚な人々のモデルです。(…)キリストの良き信奉者、ほんものの弟子になるためには偉大なことは必要でなく、真正正銘であれば日常的で単純、人間的なことがあれば充分である。聖ヨセフこそ、これを証明する御方なのです。」(パウロ六世の講話、六九・三・一九)(八九・八・十五付)





# 不変の教え

保っていたのです。こうして自分が衰えることや死ぬことを思って憂慮することなどありませんでした。神が最初から人間に与えられた世界全体を「支配する権能」は、まず最初に人間が自らを支配することとして実現しました。この自己支配と均衡の中で、人間は存在の「十全性」を持っていたのです。それは、人間がその全存在において無傷で完全であり、秩序を保っていたということでした。なぜなら、感覚的快楽、地上の富をむやみに欲すること、理性の命令に逆らって自己を主張すること、などに向わせる三重の情欲を免れていましたから。

従って人間は他者との関係においても秩序を保っていました。

人間同志の最初の関係、幸せな親しい交わりにも秩序がありました。人間社会の最初の夫婦であり、最初の核でもある男と女、アダムとエバの関係のように。創世の書の簡潔な文章は、この視点から非常に雄弁に語っているように思われます。「さて、男とその妻とは、ふたりとも裸であったが、はずかしいとは思わなかった。」(創世2・25)

啓示によってわかるように、神の似姿として創られた人間の中に、原初の義と完全性が存在したからといって、他の霊的存在と同様に自由を与えられた被造物として人間が、最初の瞬間から自分の自由を試されることを免れていたというわけではありませんでした。啓示によれば、人間に存在の幸福をもたらす神との睦まじさのおかげで、罪を犯す前の人間が原初の義(原始義)

の状態にあることを示すと同時に、人間のために予定されていた根本的なテストと、人間がそのテストに落ちたことをも告げています。

このテストは、「善悪の知識の木」の実を食べてはいけません、

というかたちで次のように描かれています。「主なる神は人に命じておせられた、園のすべての木の実に自由を食べてもよい。だが善悪の知識の木の実を食べてはいけません。それを食べたなら、きっと死なねばならなくなるからである。」(創世2・16、17)と。

ここにおいて創造主は最初から、理性ある自由な人間に対して契約の

## 聖母よ

### 御子のうちに生きることが

### できまますように

「私がその人の内にいるように私にとどまる者は多くの実を結ぶ。」(ヨハネ15・5)

今日の典礼は、ぶどうの木とその枝のたとえについて語っています。

このたとえは、ちようどぶどうの木からその枝が生命を得ているように、キリストと教会の間の、そしてキリストとキリストから生命を得ている人々との間に存在する(有機的な)絆に特別の光を与えてきわだたせています。

このたとえは一人ひとりに当てはまりますし、同時に神の民の共同体全体、すなわち教会にも当てはまる

神として御自分を示しておられることがわかります。契約の神は、友愛と喜びの神であると同時に善の源泉としての神でもあり、従って倫理的意味での善と悪の区別の源でもあるのです。善悪の知識の木は、一被造物である人間が、認め、尊重すべき絶対的な限度を象徴的に思い出させてくれます。つまり、人間は創造主に従属するものであること、そして創造主が創られた世界の秩序、存在の本質的な秩序のために制定された法に従わねばならぬこと。従って、人間は自由の行使を規制する倫理基準に従うべきものでもあります。ですから最初のテストは、自由な状態

におけるその人の自由意志を試しているのです。人間は、その行為の中で創造の基本的秩序を確認するでしょうか。また、自分自身が創られたものであるという真理、すなわち一方に神の似姿としての己れに属している尊厳、一方に被造物ゆえにも自身の限界という真理をも認識するのでしょうか。

不幸にもテストの結果は落第でした。啓示はこのことを告げていますが、この悲しい知らせは、贖いの真理と関連して示されました。私たちは、慈悲深き創造主である主を、信頼を込めてあおき見ることができるとは、

天に上げられたイエズス・キリストにおいて、私たち人間に与えられたこの生命にとって、「私の父はぶどうの栽培者なのです。」

過越の秘義に感謝しましょう。この秘義の中でキリストは、御自分を一度だけぶどうの木として啓示なさり、同時にぶどうの木の栽培者としての御父を啓示なさったからです。

一人ひとりのキリスト信者——御子において——復活されたキリストにおいて、御父の「神聖な耕作物」として熟すること、それが私たちの願いです。

全ての人が、この主との(有機的な)絆を通して豊かに実を結ぶこと、それが私たちの願いです。

私たちの祈りをキリストの御母にお捧げしたいと思います。(…)

御子の内に、ぶどうの木であるキリストの内に、私たちがとどまれるようマリアの助けを願ひましょう。

## ★★もうご購入手続きはお済みですか？

### 「教皇様の声」年間購読者募集中。

ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのままわかり易い日本語に訳して伝える月刊紙「教皇様の声」。この機会にぜひ、ご一読をおすすめします。

- 年間購読料1部 900円+送料(1~19部) 600円を郵便振替：神戸3-72393 精道教育促進協会までお送りください。本紙を毎月ご自宅まで郵送でお届けします。
- 教会で2部以上まとめてお申し込みになると送料無料で。教会名・ご担当者名・部数を明記の上、お申し込みください。



- ◆「教皇様の声」が3年分保存できる専用保存ファイルも発売中です。
- ◆ポリプロピレン樹脂製・ブルー・金文字装丁。
- ◆税込み定価750円。(1冊・250円 2冊・360円 3冊以上・600円) ご希望の方は「教皇様の声」係まで。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393